

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0373000744		
法人名	有限会社ヘルパーはうす		
事業所名	グループホームまぶる		
所在地	岩手県下閉伊郡山田町山田3-35(第4仮設団地内)		
自己評価作成日	平成24年2月18日	評価結果市町村受理日	平成24年4月26日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokouhyou.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=0373000744&SCD=320&PCD=03
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	(財)岩手県長寿社会振興財団
所在地	岩手県盛岡市本町通3丁目19-1 岩手県福祉総合相談センター内
訪問調査日	平成24年3月6日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

高齢の入所者が本心で求める生活とは何か？職員が常に探求しなければならないことだと思うが、ただの施設PRだったりアクションにならないよう、また押し付けにならないよう援助したいと考えています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

平成23年3月11日の津波により事業所は流失した。利用者は職員の誘導により安全に避難し、民家でしばらくの間過ごした。8月から現在の仮設団地に引っ越し、職員の見守りのもと穏やかに過ごしている。食べる物も何もない中での介護を経験し、職員は遅くなった。「命をまぶる」という想いはこの経験を通して培われたものであり、事業所の理念につながっている。命を助けてもらったという感謝の音が家族からもたくさん寄せられている。「生かした」お年寄りに、今、自分たちが「生かされている」という管理者の言葉が、この1年間を物語っているように思われる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価票

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	入所者の立場に立った場合、その生活に何が望まれるのか？全職員で考え最良と思われる言葉を基本理念としています。	理念は「個人の命と生活をまぶります」となっている。この理念は、震災の体験を通して、職員で話し合っ決めてたものであり、自分たちが何を「まぶる」のかと考えた時、自然に「命」という言葉が出てきた。地震が起こるたびに、気持ちを引き締めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	運営推進会議を定期的開催し、地域や他事業所より行事等の情報収集を行っている。入所者の心理・環境面での参加を検討し交流を促している。	津波により事業所及びその周辺が流失し、昨年の8月に現在の仮設団地に引っ越している。仮設の入居者との交流は少なく、隣接の施設に落語や映画が来た時に見に行く程度である。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	認知症についての相談事には常時対応している。ボランティアを通じて地域の老人会等の団体に認知症についての説明会を開催してもらえるように推進しています。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	入所者の状況、活動など様々な意向を提示し、参加委員からの評価にはすぐに対応している。	昨年の10月から、隔月で開催している。被災後に運営推進会議メンバーの選出から始めた。現在の事業所の状況報告、行事や活動内容の報告を行い、様々な意見を頂いている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	事業所としての不安や確認事項のみならず、新規入居者の選考等にも連絡をとりあったり・・・と、震災前以上に協力関係が出来ている。	震災以降、仮設の施設を借りながら事業を行っているため、全てにおいて指導監督する立場の町と相談しながら行っており、協力関係が出来ている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	ホーム内での勉強会を行ったり、今後も外部での研修会があれば積極的に参加したいと思う。職員間で意識を統一する事で身体拘束ゼロのケアに努めている。	スピーチロックをしないように心がけている。しかし危険防止のため必要な時もあるので、柔軟に対応している。外部研修への参加、2ヶ月ごとの所内研修を今後、予定している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	関連法について研修する機会は中々ないが、職員間での助け合いでストレス軽減を計り入所者に対してゆとりある対応に努めている。		

岩手県 認知症対応型共同生活介護 グループホームまぶる

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	外部研修についても管理者や計画作成担当者の参加のみで全職員が学ぶ機会は少ない。又、介護の職域を越えているとの意向も聞かれるが、相談事があれば窓口を紹介するなどの対応は出来るようにしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約事項のみならず、本人の不安、家族の不安、予測される状況等に留意し、どう対応していくか？を話し承諾を得ている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	契約締結時には相談・苦情窓口の説明をおこなうし、毎年4月には家族や本人にアンケートを実施している。また、投書箱の設置もしてある。	毎月1回利用料の支払いに家族が来た時に、利用者本人の様子を知らせたり、衣類の交換をお願いしている。その際に家族の想いを聞き取るように心がけている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	意見・提案は直接管理者が聞き、可能な事であれば即日対応している。	職員にアンケートをとり、面接を行っている。職員は、震災で何も無い中での介護を経験し、工夫をすることや精神的な強さを身に付けてきている。職員をバックアップするため、資格取得への資金援助、主任・副主任を置いて、責任ある仕事をするよう変えてきている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	報酬や経営状態に応じて左右されることで簡単に環境や条件を整備できるものではない。入ってくる金があれば職員に還元しようとする気持ちは何処の代表者より強く持っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	震災後は一時停止状態。本来であれば2か月に1回法人内で企画した勉強会を実施。今後定期的に研修機会を設ける事としている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	県のGH協会のみならず、沿岸地区のG協会の交流が盛んになり職員は刺激されている。また山田町の同業者とはお互いの運営推進会議に参加し合い助言しあっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前面接をする事で不安や相談に対応している。しかしながら本人の口から出る言葉は入居拒否が多いの現状です。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居申し込みがあった段階で家族や居宅の担当ケアマネから情報を聞き、自宅と施設の違い、家族と他人へ対する違い等、それまでの入所者の例で話をし不安や困っている事への助言をしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談時点で客観的に話せるよう。また、家族や本人が何を優先で必要としているのか知るよう努め、GHだけでなく、介護保険全体の説明や居宅サービス・施設サービスの説明等、必要に応じて対応している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	日々の生活を通して入所者から“知恵袋”を引き出すよう声掛けを行っています。会話の中から楽しみや昔の出来事を聞いたり、作業でも年寄りのやり方から学ぶように接しています。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	入所者の状況に応じて、家族にはホームへの出入りを自由にと話しているし何時何時の外出、外泊も出来るよう話し関わってもらえるようにしている。当然、行事参加や周辺症状悪化時の話し合いもしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	懐かしい場所、気になる場所、行きたい場所を探りながら遠足やドライブの行き先としている。希望があれば個々に対応する事もしており、これまでにはお寺での祈祷や神社参拝等実施してきた。可能であれば援助できる体制でいる。	それぞれの利用者と、どこに行きたいかを話し合い、それぞれが希望の場所に職員の付き添いで出かけることが出来る支援を行っている。自宅に行ったり、白鳥を見に出かけたり、自分の好きなものを食べに出かけたりと(利用者)本人の大切にしてきたものを探る支援となっている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	孤独気味の入居者には趣味を披露してもらう機会を設ける事で関わり合いを増やし、その人に興味をもってもらうよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	本人、家族が困らないよう窓口の紹介、必要書類の作成、施設とのやり取り等、必要な助言や相談事には最大限支援している。今までの例では家族が行事に参加してくれたり、ホームの様子を見に来てくれた経緯がある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	月1のミーティングで、その人の気にしている事を職員で話し合い、対応するようにしている。年度初めには本人から職員が個々にアンケートを聞き取り意向に沿うよう援助している。	本人が最近訴えたこと、家族の話、利用者の変化の様子等を持ち寄り、ミーティングで検討している。意思表示が難しい利用者とは、手振り身振りで話をし、細かな観察により意向を把握している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時点で生活歴や経緯、生活の中で出来る事等を聞き取り把握に努めている。また必要に応じて居宅時の担当ケアマネより情報を提供してもらい援助に役立てている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	押し付けにならない日々の過ごし方を心身状態も考慮しながら職員は意識している。日々の生活から出来る事、出来ないこと、その時のやる気等の気持ちを汲み取り対応している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人が気にしていること、職員が気になることを月1のミーティングで話しあい、生命維持、疼痛の軽減、本人希望、家族希望なもので内容を精査し、実施できるもの解決可能なもの計画としている。	担当制をとっており、その職員を中心に本人の気持ち、職員の想いを記入している。それをもとにケアマネが評価し、今後の見通しを話し合い、実現可能な目標を立てている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別のケース記録があり日々の様子を記入している。また月1のミーティングや、朝夕の申し送り利用者個々の情報を共有している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	実施にいたっておりません。		

岩手県 認知症対応型共同生活介護 グループホームまぶる

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	要請時の協力を文書にてお願いしているし、生活の様子を知っていただくために広報を各機関に配布しています。また、運営推進会議にはテーマ事に消防職員や保育園職員等に参加していただき助言をいただいています。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人や家族の希望を重視しながら受診援助をおこない、状況の変化に応じて必要と思われる医療機関の紹介など了解をいただきながら的確に実施しているつもりです。	震災により町内には入院施設がない状態となった。震災直後は国境なき医師団の診察を受けた。お薬手帳の流失により服薬内容の調査が必要となった。かかりつけ医の受診が基本であり職員が付き添っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職員は配置していないが、入所者の急変時にはすぐに協力病院を受診し、必要であれば看護師の協力や指示を仰いでいる。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入退院時に書類での情報交換がある。必要であれば話し合いを設けてもらい、病院側の事情とホームの事情を話し合う機会があり可能な場合は早期の退院に繋がっています。開所からのやりとりで病院側はホームを理解した対応をしてくれています。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですべてを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合の話し合いを契約時点からしているし、その状況に応じて何度でも話す機会を設けている。GHの環境で、設備で対応可能なうちは出来る限りの援助を約束している。	どのような状態になれば介護サービスが困難と判断するかの考えが重要事項説明書に明示されている。しかしながら、可能な限り事業所で世話をしている姿勢が貫かれており、介護度の高い利用者が受け入れられている。	医療行為が必要となった時どうするか、医療機関との関係構築、職員の研修と共通認識作り等課題が見えてきている。避けては通れない問題であるので、計画的な準備を望みたい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	毎年、AED併用の心肺蘇生法や応急処置の研修へ参加している。またマニュアルを作成し全職員へ認識させ事故発生時へ備えている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に数回の避難訓練を実施し、最小限の職員数で短時間に如何に避難完了できるか訓練している。しかし仮設の為、地域との協力体制は築けていないのが現状です…。	1年前の津波で事業所は大きな被害を受けたが、利用者は全員避難することが出来た。それ以降、職員は非常時を心配して夜間2名で泊まっている。夜間想定津波避難訓練を行い、持ち出しの物品等確認している。火災避難訓練は今後予定している。	津波の際は山に逃げるとしているが、職員がその避難路を把握出来ていない。利用者の介護度も高く、車いすや歩行器使用の方も多し中、いかに全員の命を守るのか大きな課題となっている。前回の避難を教訓とし、実現可能な対策を望みたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入所者に理解してもらう為、方言や地域の言葉で声掛けを実施しているし、個々が好む言葉の掛け方を使い分けている。	利用者に合わせた言葉掛けを行っている。「この利用者には、どうしてこのように接しているのか」という理由を、一人ひとりの職員が自分の言葉で説明出来ることが大切と考えている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	押しつけにならないよう意識し本人の了解のもと支援しています。身体面でも配慮行い、本人にとって何がいいのか考えながら援助している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	無理な強要はせず、入所者一人一人のペースで過ごせるよう気を配り援助している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	毎朝鏡の前で洗顔や整容を促している。その他、要望時には床屋へ以来する等対応している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	毎日、昼食は何を食べたいか入所者へ聞き取り希望に応じて食事を提供している。常時、入所者4人から5人が職員と一緒に調理や食事の片付けを行う事で得意分野を活かしている。	朝・夕の献立は、栄養士が作成するが、昼の献立は何が食べたいかを利用者と相談して決めている。レタスをちぎったり、食器を拭いたり出来る場所で職員と一緒にやっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事の摂取量や水分量は常に把握できるように記録している。摂取状況の変化に応じて刻んだり、トロミをつけたり個々の状態に合うよう援助しています。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後、歯磨きや義歯洗浄の促し、介助を実施している。また毎日薬剤での義歯洗浄を行って対応している。		

岩手県 認知症対応型共同生活介護 グループホームまぶる

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	時間を決めて排泄誘導行ったり、落ち着いた行動は言動、表情等から排泄のサインを見落とさなよう努めています。	夜間は、オムツを使ったり、ポータブルトイレを使用する利用者が多い。定期誘導により、日中はリハパン使用となっており、排泄の失敗は、ほとんど見られない。水分摂取も支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	薬に頼るだけでなく、水分量の確保を行い、その他食物繊維の多い食事を摂取したり乳飲料の摂取を勧めてる。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	基本的に希望に応じていつでも、どの時間帯でも入浴可能に準備はしている。本人の要望も勿論だが、週に2日から3日の入浴は確保できている。	入浴を嫌がる利用者には促しや、気分転換の後、再度、声掛けをするなど工夫をしている。入浴後の昼寝が気持ちが良いという声が聞かれている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	休息できる空間は個々にあり、一人ひとりの生活習慣を尊重し介護している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個々の薬剤の副作用、用法・用量がすぐに確認出来るよう個別のファイルへ綴じてある。また新たな服薬に関しては状態の変化に留意するよう努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	縫い物や食事の準備・片付け等で本人の能力を発揮してもらっている。毎日行ってくれているので「これは自分の仕事」とやりがいを持ってくれる方もいます。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	年齢的やレベル低下により要望は減ってきているが、定期的にドライブを実施し、その際買い物をするなど楽しんでもらえるよう援助している。	夏には歩行訓練を兼ねた施設周辺の散歩が行われている。ソフトクリームや、大判焼きなどを買いに道の駅に出かけたり、紅葉見学と食事を兼ねてやまびこ館までドライブしている。今は雪も多く、足場も悪いので、外出の機会は少ない。	

岩手県 認知症対応型共同生活介護 グループホームまぶる

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	能力に応じて対応可能だが、無理に金銭を持たせても共同生活ではトラブルの元であることも考慮しておかなければならない。金銭に執着がなくなり、口にすることも殆ど無くなっている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	入所者が集まるフロアに子機を設置。希望に応じて職員がダイヤルしたり代わりに話を聞いたり支援している。入所者の申し出と、管理者の判断にて手紙のやり取りには代筆で対応している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	入所者一人ひとりが自分の作成した作品をいつでも眺めれるように装飾している。	仮設の事業所のため、釘を打ったり、画びょうを使ったり出来ないという制限があり、苦勞している。奥のスペースには七段飾りのおひなさまが飾られ、利用者が折ったおひなさまが飾られている。一人ひとりが書いた名前とメッセージが貼られた龍の貼り絵も掲示されていた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	対人関係に疲れたり、静かに過ごしたい希望などに対応して談話室にテーブルや椅子が設置してあります。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入所時点で持ち込み可能な部品リストを渡し、本人の好きなように、くつろげるように部屋作りするよう助言している。	「津波の時に来ていた服しか残らなかった」ところがスタートである。備え付けのベッドと支援物資の筆筒、衣類が置かれていた。居室入口の番号表示は、各利用者の名前の入った温かみのある表示に工夫がなされていた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	入居部屋の玄関となる入り口には個々の姓を表示し分かりやすくしている。		